JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	九谷焼再生のためのビジョンづくり
Author(s)	
Citation	JAIST社会イノベーション・シリーズ，19
Issue Date	2008-03
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/4871
Rights	
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

■ 今後の展望

平成20年度、能美市は、ハード・ソフト両面から事業計画書を取り纏めるとともに、内閣府に地域再生計画の認定申請を行う予定です。将来的には、訪れる人が陶磁器の産地らしさを感じるまちづくり、九谷焼が息づき市民が親しみや誇りを持てるまちづくりを目指します。

能美市の将来像

来訪者が陶磁器の産地らしさを感じる“まち”
九谷焼に親しむ来訪者の増加
九谷焼と能美市が連想される知名度の向上
九谷焼が息づいた“まちづくり”と市民が親しみ、誇りを持てる“まち”

産業振興の指針

- 九谷焼を代表する拠点形成に向けた環境づくりの推進
- 地域に相応しい観光モデルの構築と観光誘致の推進
- 産学官連携による技術開発の推進と人材育成事業の推進
- 後継者育成に向けた若手人材との交流機会の促進
- 産官による情報発信マネージメントを戦略的に推進
- 陶芸の里らしさを演出するためのハードとソフト両面からの施策

21世紀 COEプログラム

「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」とは？

「21世紀COEプログラム」とは、日本に世界最高水準の研究教育拠点（center of excellence）を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材の育成を図るため、平成14年度から文部科学省が実施している事業。「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」は、本学で採択された最初のCOEプログラムであり、平成15年度から始まって今年が5年目、すなわち最終年度にあたる。本プログラムでは先端科学技術の研究の場、さらに社会のあらゆる状況において、イノベーションを起こすための知識創造プロセスの研究、そして、それを担う人材としての「知のコーディネータ」「知のクリエータ」育成に取り組んでいる。文理融合を、マテリアルサイエンス研究科（理系）と知識科学研究科（広い意味での文系）の連携プロジェクトという形で実践している点が、本COEの大きな特色である。

JAIST 社会イノベーション・シリーズ　No.19

発　行　2008年3月

発行所　国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学・科学技術開発戦略センター
〒923-1292　石川県能美市旭台 1-1　知識科学研究科棟Ⅱ7階

■本誌に関するご意見、お問い合わせ
TEL：0761-51-1839　FAX：0761-51-1767　E-mail：coe-secr@jaist.ac.jp

本誌は、文部科学省21世紀COEプログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」の助成を得て発行しております。

JAIST
JAPAN ADVANCED INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY 1990
北陸先端科学技術大学院大学

JAIST SOCIAL INNOVATION SERIES
社会イノベーション・シリーズ 19

九谷焼再生のためのビジョンづくり

※写真は能美市の酒井市長に九谷焼再生ビジョンの答申書を提出する碇谷研究員と小林准教授 2007年12月21日（北陸中日新聞 2007年12月22日第19面より引用）

石川に生まれ、石川の人々が育ててきた九谷焼。古くからまちの「顔」として活躍してきた九谷焼だけど、最近ちょっと元気がない？　平成19年度、能美市は「九谷再生ビジョン委員会」を立ち上げ、JAISTと連携して九谷焼再生のための第一歩を踏み出しました。地場産業の元気はまちの元気につながります。九谷焼の振興は、ひとつの産業の活性化にとどまらず、まちづくりの機軸となる可能性を秘めています。能美市とJAISTは、これからの九谷焼、これからの能美市の姿を描いていきます。

No. 19

JAPAN KUTANI PROMOTION

JAIST と能美市が連携し、九谷焼再生ビジョンを策定

能美市は平成 17 年 2 月に、辰口町、寺井町、根上町が合併して誕生した人口約 49,000 人の新しい自治体です。能美市の地場産業である九谷焼は、地域の歴史を物語る文化的な財産であり、全国的な知名度も高く、地域のイメージを形成する代表的な財産ですが、近年ライフスタイルの変化により需要が低迷する、安価な輸入品に押されるなど、厳しい環境に置かれています。生産額は平成 2 年の 165 億円をピークに、年々減少し、平成 17 年には 58 億円にまで落ち込んでいます。これに伴って九谷焼産業に従事する人も減少傾向が続いています。このことから、平成 18 年 12 月に策定された「第 1 次能美市総合計画」では、"次代に受け継ぐ、魅力あふれる九谷の里" を施策目標に、後継者育成や技術開発、販路開拓の拡充が謳われた産業施策が盛り込まれています。能美市の顔とも言える九谷焼産業の再生は、地域活性化の鍵を握る事業であるといっても過言ではありません。

九谷茶碗まつりは、陶祖九谷庄三、斉田道開の遺徳を偲んで毎年5月3・4・5日にかけて行われる年に一度の九谷焼大感謝祭。全国各地から焼き物ファンが訪れる。

一方、能美市に立地している JAIST では、従来からセミナーや講演会など、地域に向けたさまざまなイベントを実施しており、多くの教員が研究室単位で地域連携や地域貢献のかたちを創りあげてきました。平成 18 年 3 月には、こうした個と個のネットワークを組織的な活動に発展させるため、能美市との間に学官連携協定を締結しました。本協定の目的は、大学所有の知的財産を活用することで、市の活性化や生涯学習、産業振興、まちづくりなどの課題解決に関して相互の自主性を前提とした連携・協力関係を可能な範囲で推進していくことにあります。また JAIST では平成 19 年度より、伝統工芸を支える知恵や技と先端科学技術の融合を進め、石川県の伝統工芸産地の活性化に貢献していくことを目的とした「石川伝統工芸イノベータ養成講座」を開講しています。

こうした背景から生まれたのが、JAIST と能美市が連携して進める九谷焼再生プロジェクトです。

能美市泉台町にある九谷陶芸村。美術館や資料館、工房や技術研修所がある。九谷焼卸団地では 16 のショールームが軒を並べる。

九谷陶芸村の区画興にある陶芸館。裏手にある登窯の煙突が見える。

地場産業の振興を通して、住民が誇れるまちづくりを

平成 19 年度には、九谷焼再生への第一歩として能美市に地域再生計画の基本構想に向けた諮問委員会である「能美市九谷再生ビジョン委員会」が発足しました。委員会では、JAIST の碇谷勝研究員、小林俊哉准教授を交えた 13 名の委員が計 6 回にわたって、地域活性化のために地域資源である九谷焼をどのようにまちづくりに活用していくか、また市としてどのように支援していくべきかについて検討し、「九谷焼を軸足に据えた地域活性化についての基本的な考え方」と題した九谷焼再生による地域再生計画素案を市長に答申し、拠点づくり、観光振興、人材育成、商品・技術開発などを提言しました。平成 20 年度は事業計画書を取り纏めるとともに、内閣府に地域再生計画の認定申請を行います。

ビジョン委員会では、九谷焼産業の振興と地域活性化がどのように結びつくのか、地域経済の視点とまちづくりの視点からその意義を確認しました。

地域経済の視点から見ると、第一に雇用を確保することが喫緊の課題であり、これ自体が地域活性化の必要条件です。また温泉旅館業との連携も図りながら観光資源としての九谷焼をアピールすることで、地域への交流人口を増加させ、ひいては他産業への波及効果も期待できるという点でも、地域活性化に果たす意義は大きいものです。

まちづくりの視点では、九谷焼は合併間もない能美市の市民が "まちの顔" として共有できる資源だと位置づけられます。能美市九谷再生ビジョン委員会では、基本構想の策定段階で、九谷焼に関する市民の意識調査を実施しました。その結果、辰口町、寺井町、根上町の旧三町に共通して九谷焼を地域のシンボル、地域の財産として活用していきたいという意識が高いことが明らかになり、同時に能美市民のまちづくりに対する参加意識が高いということも分かりました。住民が誇りを持てるまちづくりに九谷焼が果たす役割は大きいものと期待できます。

平成 19 年 11 月、東京・有楽町駅前の有楽町電気ビルで開催された能美市の観光 PR イベント「ビジット NOMI」に九谷焼も出展。絵付けの実演も行われた。

「九谷焼」とは

九谷焼は、大聖寺藩主の命令で後藤才治郎が有田で修行し、1655 年頃に現在の加賀市山中温泉九谷町に窯を開いたのが始まりとされています。九谷の窯は 1730 年に閉じられ、この間に焼かれたものが古九谷と呼ばれています。古九谷の廃窯から約 80 年後、加賀藩営で金沢に春日山窯が開かれ、再興九谷の時代に入りました。春日山窯の木米風、古九谷の再興を目指した吉田屋窯、赤絵細描画の宮本窯、金襴手の永楽窯など数多くの窯が出現しています。明治時代に入ってからは、九谷庄三の彩色金襴手が有名となり、大量の九谷焼が「ジャパン・クタニ」として海外に輸出されました。今日の九谷焼は、各時代の窯の上絵付けの作風が源流となっています。